

令和2年度第1回宗像市総合教育会議議事録

【日 時】 令和2年7月21日（火）午前10時から午前11時45分

【場 所】 宗像市役所 本館3階 304会議室

【出席者】 宗像市長 伊豆美沙子
教育委員 宮司葉子
教育委員 石丸哲史
教育委員 釜瀬計
教育委員 大庭多美枝
教育長 高宮史郎

【その他の出席者】 教育子ども部長瀧口健治、教育子ども部子どもグローバル人材育成担当部長徳永淳、経営企画部長長谷川勝憲、教育子ども部主幹指導主事安河内友美、教育政策課長中野道子、教育政策課参事兼社会教育主事久保謙司、教育政策課指導主事村上暢崇、教育政策課指導主事川原慎一郎、教育政策課指導主事名切太志、学校整備プロジェクト室長狩野長江、教育政策課指導主事兼特別支援教育アドバイザー江崎美那子、経営企画課企画係長中山崇、教育政策課学務係長新海香浪、教育政策課学務係長井口綾、教育政策課政策係長福永貴志、教育政策課政策係主任主事飯野佳代

※傍聴 なし

1 開会

【伊豆市長】 皆さんおはようございます。定刻になりましたので、ただいまより令和2年度第1回宗像市総合教育会議を開催いたします。今回の会議ではICTを活用した学校教育の充実について、宗像市における特別支援教育についての2項目を協議議題としております。教育委員の皆様から忌憚のないご意見をお聞かせいただければと思います。本日はどうぞよろしく願いいたします。では、議事進行について事務局より説明をお願いいたします。

【教育政策課長】 教育政策課の中野でございます。どうぞよろしく願いいたします。ただいま市長からありましたように、本日の議題は、「ICTを活用した学校教育の充実について」、「宗像市における特別支援教育について」を協議のテーマといたしております。いずれも、本市ではこれまでも取り組んできた事業で

はございますが、新たな局面を迎えているものでございます。ICTについては、子どもの学びや校務において、より効果的に、より時代に即した活用ができるようにしていきたいと考えております。また特別支援については、これまでも宗像市では乳幼児期からの発達相談、就学時における保幼小の連携と成長段階に沿って様々な支援を行ってきました。また学校現場では特別な支援を要する子どもが年々増加しており、個に応じたより効果的な支援が必要と考えております。また、今年度より特別支援教育アドバイザーを配置し、令和7年度には県立特別支援学校の開校も控えております。そういった事から、本日はこの二つの重点課題について議題とさせていただきます。各項目において担当から説明を申し上げた後、ご意見ご提案をいただきながらご協議いただきたいと思います。それでは、協議に入ります。ここからは市長に進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

2 協議事項

(1) ICTを活用した学校教育の充実について

【伊 豆 市 長】それでは早速協議に入ります。1項目目、「ICTを活用した学校教育の充実について」です。今回5月補正予算において、児童生徒へのタブレット端末を1人1台整備するための予算を計上し、議会の承認をいただきました。これからICTを活用した宗像市の学校教育の大きな変革期を迎えることなのですが、ハードを整備しただけでICT教育が充実するものではありません。タブレットを授業や学校活動でどのように活用していくのか、子どもたちにいつ、どこで、どのように使用させるのかが大きな課題となります。今回の導入に当たっては、新型コロナウイルスの感染防止対策として、学校で休校が長期に及び、学びの保障が急務であったことがきっかけではありますが、予てからの現場の要望を踏まえたものでもあります。昨年度、教育委員会が市立学校の教職員に対して実施したアンケートの中で、今後導入してほしいICT環境や整備等は何ですか、という質問に対し、児童生徒用の1人1台端末、無線LAN（Wi-Fi環境）、大型提示装置が多く、学校現場からはICT機器、とりわけ子どもたちへの1人1台の端末整備と、それを活用するための環境整備が強く要望されていると感じた次第です。国の補正予算において、1人1台端末の整備と校外通信ネットワークの整備について、自治体に対する補助が決定したこともきっかけとはなりましたが、宗像市の教職員の皆様の熱い要望に応えたいということが今回の補正予算を計上した根底にあります。活用等については、これから事務局の説明がありますが、私としては急に決定したICT機器導入の現場で、教職員の先生方の負担にならないようにしたいと考えております。ただでさえ日々忙しい教職員の先生方が、慣れないICT機器を使用することで一層忙しくなることが

ないよう、フォロー体制も併せて整える必要があると考えております。それでは、事務局から説明をお願いします。

【名切指導主事】教育政策課の名切です。ICTを活用した学校教育の充実について説明をさせていただきます。今回、新型コロナウイルス感染症の拡大で臨時休業が長期化しました。その中で、宗像市では、最初は復習を中心とした家庭学習を継続したり、電話で連絡をしたりというようなことで対応していましたが、臨時休業が延長することが決定したことで、予習学習を開始しました。実際に計画表を作って、プリントを使った予習学習や、一部の学校ではオンラインを使った予習学習を進めてきたという実態があります。このような中で、児童生徒の学習の保障と心のケアに大きな課題が生まれました。そこで市長にご決断をいただき、5月22日の臨時議会で市の補正予算として、学びを保障するICT環境整備に8.9億円を予算として成立させていただいたところです。これまでも全くなかったというわけではなく、ICTを活用した学校教育の充実のために整備は行ってきております。パソコン教室の整備、普通教室や特別教室への整備、特別支援学級のタブレット整備、さらに研究指定校2校ですが、河東西小学校と日の里中学校には現在もタブレット端末が入っております。また、校務支援ソフト等も導入してきています。ただ、これからGIGAスクール構想を実現するために、各教室の無線LANやタブレット端末8,307台を整備し、クラウドサービスの活用もしながら授業等の支援をしていくということを考えております。そこで、GIGAスクール構想の実現で三つの変わること、変えたいことを中心にお話をさせていただきます。「授業が変わる」、「家庭とつながる」、そして先生方の「働き方が変わる」という三つです。一つずつ説明をさせていただきます。まずは「授業が変わる」からです。授業が変わることとしては、大きく二つ考えております。まずは、宗像市の子どもの「情報活用能力」を育成したいということです。新学習指導要領に明記された、全ての学習の基盤となる三つの資質能力の中に「情報活用能力」というものが挙げられております。「学びに向かう力、人間性等」では、情報社会に主体的に参画しようとする態度や情報社会の発展に主体的に寄与しようとする態度。「知識及び技能」では、情報を適切に活用する知識や技能、情報社会の影響、法、情報モラルや個人が果たす責任についてしっかり理解をするということ。「思考力・判断力・表現力等」では、情報から新たな価値を創造しようとする思考力や問題解決をするために情報を活用する力です。また、メディア等でもよく言われております、プログラミング的思考力というものをここに入ってきております。このような、国が求めている力をしっかり宗像市の子どもたちに育成していくためには、やはり教育のICT化が必要であると考えております。次に、各教科等でICTを活用して学びを深めていくことを考えております。資料A、B、Cの「一斉学習」、「個別学習」、「協働学習」で1

0の分類をスクリーンに示しております。資料の青で示した部分、教員が電子黒板で教材の提示を行ったり、パソコン室でインターネットを用いた情報収集や表現物を作ったりというようなことは、これまでも実践されていることでもあります。これに加えて、資料のピンクで示した部分で、一人一人の習熟の程度に応じた学習をAIドリルで行うといったことや、それぞれが考えたものをタブレットに出して、それが電子黒板等の大型提示装置に提示されて、それを操作しながら考えを議論するというようなC分類のところも、これから宗像市の学校で取り組んでいきたいというふうに考えております。二つ目は「家庭とつながる」です。緊急時や不登校、長期欠席等の子どもたちともつながっていくということです。授業動画や学習内容の説明を配信したり、双方向型のオンライン授業等をしていく事で、これから新型コロナの第二波、第三波、また災害等が起こった緊急時でも、家庭とつながりながら学習の保障や心のケアを進めていきたいと思っております。三つ目は、先生方の「働き方が変わる」です。ペーパーレス化や効率的な授業づくり、データ連携や外部とのつながり、正確な集計作業等、ICTを用いて校務を行っていくことで、先生方の働き改革を進めたり、そこで空いた時間で子どもたちに関わっていく時間や授業づくりにかける時間を増やしていくことができるのではないかと考えております。ただ、このように三つの「変える」を実現していくためには、学校教育の情報化を意図的、計画的に進めていくことが必要です。そこで、まず第5次宗像市学校教育情報化計画を早急に策定すること、そして年度中に、1人1台端末と高速大容量ネットワーク等を整備していくことを考えております。また、先生方が研修を行いながら、その使い方等も学んでいくために、かとう学園を市の指定として授業公開等を行うことを考えております。また、各校においても日常的な活用や研修会、授業交流会の実施を検討していきたいと考えております。ただ、これからの検討事項としまして、いくつか協議しているものがございます。教員のICT活用能力の向上のためにどのような組織を作っていけば良いのか、現場の先生方が主体的に進めていくためにどんな組織を作っていくのか、また市としての研修会のあり方や進め方をどうしていくのか。次に、タブレット端末の使用上のルールをどのようにしていくのか。タブレット端末が壊れたときの保険をどうしていくのか。また、今回は国からも補助金が出ておりますが、令和4年度以降に入学してくる児童のタブレット端末、また他市町村から転入してくる児童生徒のタブレット端末等をどのようにしていくのかということ、現在検討中でございます。説明は以上です。

【高宮教育長】付け加えを少しさせてもらいます。実はこの1人1台のタブレットの購入を市長が決断されたんですが、これは文部科学省が出しているGIGA構想に基づいた取組であります。これは皆さん御存じのように、society 5.0、超スマート時代を見越して、大きく社会の構造が変わっていくという政府の危機

意識というのがございました。これを受けて、昨年度に第1次補正がありました。令和元年度もこの構想については各市町村にどうですかという話がありましたが、宗像市では5か年で計画的に進めていくということを最初は考えていました。そして、コロナがきました。コロナが来たときに、子どもたちの学びの保障がなかなかできないということがありました。その状況を受けて令和2年度の第2次補正があり、GIGAスクール構想を推進してほしいという政府の考えがありました。それに基づいて市長に決断をしていただいたということです。これから大きく社会が変わっていくということがありますので、情報活用能力ということが先ほども説明でありました。けれども、当然、子どもたちが機器を十分に使いこなせなくてははいけないし、どういう仕組みになっているかという理解もなくてははいけない、そういう時代になってきました。これからの子どもたちには言語能力と同じように情報活用能力というのが非常に重視され、身に付けていくこととなります。そういうことから、宗像市としても情報教育の推進というのは大いに進めなくてははいけないという立場に立っているという状況です。以上です。

【伊豆市長】はい。ではここからは、委員の皆様とICTを活用した学校教育の充実についての協議に入りたいと思います。今回コロナ禍において1人1台端末の整備を決定したところでございますが、事務局が示した今後の推進の方向性について、委員の皆様のご意見を伺いたいと思います。疑問点や提案などがございましたら、お願いしたいと思います。実はこのGIGA構想については、昨年も教育委員会において検討しておりましたが、多額の予算がかかるということ、それを現場が受け入れる、活用できる状況にあるかということ等々も慎重に検討して、昨年は導入を見送ったという経緯がありました。今回コロナ禍において、このように学校現場、教育の場から子どもたちが遠く離れてしまう、教育を受ける環境にないということが、実は決定に至ったというところでは、どちらかというより私が決断したというよりは、教育長はじめ教育委員会の皆さんの熱い熱い思い、ここでやらなければ子どもたちが教育から離れてしまう、子どもたちに教育の場を提供しなくてはという、その思いを受けて、高額な金額でございませうけれども、最終的に私が手をあげましょうということを決断して、そして臨時議会を開いて即座に決定したという経緯があります。ただ、先ほど申し上げましたけれども、予算が成立したからと言ってタブレットが今すぐ子どもたちにというふうにはいかないんですね。機材の調達には、様々な形でまだ経なければいけないことがありまして、実際にタブレットが子どもたちの手に渡るのは多分来年だと思っております。その間に、ではこの機材をどうやって現場で活用していくのか、現場の先生たちに負担にならないようにはどうやったら良いのかということ、サポーターみたいな方にも入ってもらえるのかといったことを、各現場等のお声も受け賜りながら検討していく必要があります。そして、それが得意な先生、苦手な先

生といらっしやいますけれども、まさかどなたもいきなりこのICT教育が突然始まるとは思われていなかったと思いますので、その辺は現場の皆さんたちとの連携を図りながらどう進めていくのかということが、実は機材を導入することよりもはるかに重い命題であると思っています。

【大庭委員】はい。これから、これだけ変わっていく社会を生き抜いていく子どもたちにとっては、とても素晴らしい取組ではないかと思います。私が個人的に思ったことですが、現場にパソコンが入ってきた時の事を思い出すと、ワープロをしていて消えてしまったらゼロからやり直してたんですね。ところが、パソコンではそれを元に戻せるということを知って、どんな苦勞をしても覚えようと思いました。ちょうどその時、宗像市教育委員会が情報教育担当者を中心に全員研修を3回程してくれたんですね。そこで一太郎、ワード、エクセルまでご指導いただきました。研修そのものは時間が取られるので大変ですが、その後でこれだけのものを得られるということを経験していたので、研修を楽しく受けられました。やはり、意図的、計画的に進めるというのは一番ポイントではないかというふうに私も思います。そのときに先生方が、やっぱりこれを使うと子どもにとってこんな良さがあるというのを、先に実感されていること、そういうことが計画の中に入っていたら良いかなと思います。研修そのものは大変だと思います。新しいことを学んでいくというのは大変ですよ。でもそれは長い目で見ると、子どものためにも、自分のためにもなるという実感が持ててスタートできたら、とてもスムーズに充実していくのではないかなと思いましたので、どうぞ意図的、計画的な研修をよろしくお願いします。

【釜瀬委員】はい。感想ですが、まず、教育長はじめ教育委員会の思いを市長が受け入れられて、市議会で承認をされて全児童にタブレット配布ということで、ありがとうございます。これは文部科学省のGIGA構想の中にもあったのですが、こういう機会に宗像市が教育活動をより推進しようという市長の思い、願いがあったのだと思います。今から教育界は変わらなきゃいけない、変わろうとしている。そういう時に、今からの教育のモデルとなるようなことをかとう学園を中心に推進していただいて、宗像市から全国に発信するような教育の方向性を示していただけたらと思います。説明の中に今後の課題がありましたが、タブレットを全員に配布したらこれで終わりではなくて、これからが始まりであって、これからどういう教育活動を展開するのかというのを先生と教育委員会でぜひ色々な研修やモデル等を提示していただいて、より教育効果があるようなICT教育の取組をしていただけたらと思っています。期待しております。どうぞよろしくお願いします。

【石丸委員】これだけお金がかかることのご決断をなされた市長に、まずお礼を申し上げます。これだけお金を使った以上は、それなりの成果がないと無駄遣

いになってしまうと思います。その無駄遣いにならないようにするためにどうすれば良いかと考えた時に、短期的に見るか長期的に見るかというところは難しいんですが、先ほど説明にありましたように、このGIGAスクール構想は、当初令和5年度までという少し長いスパンを想定していたんですけども、ご存知のようにコロナでこのようなかたちになりました。なぜ急いだ形になったかというところ、学びの保障を最優先したということですね。ということは、ICTを活用したリテラシー教育よりも、まずは学びの保障を優先するという順番となり、そこに、多額のお金を投入なさったんじゃないかと思うんですね。つまり、学びの保障を続けていくと、教員の負担が大変なことになる。これをICTに委ねようかということになったのではないかと思うんです。ICT、タブレットのおかげで助かるのは、時間と空間の壁を克服することができる、時空間の障害の解消であると思うんですね。ICTのおかげで授業と会議の二つの仕事をこなすことができるならば、負担軽減と思うんですね。そういう意味では、やはり市長が冒頭からおっしゃっております、現場の負担軽減がタブレットのおかげでここまでできているということを前面に打ち出すためには、ICT教育や情報リテラシーへの展開というのがありますが、まずはタブレットそのものの効果を前面に押し出すべきではないかと思います。そういう意味では、まず、それぞれの現場の先生方にお示しいただきたいのはタブレットのハウツーですよ。タブレットがあったらできること、あるいはタブレットによって助かること、あるいはタブレットに委ねて済むこと、こういったものの事例を取り上げていただいて、「タブレットのおかげで何々ことができました」「私はこれで楽になりました」というように現場の先生方に示していただきたいと思います。そうでないと、例えば資料3ページを現場の先生が見られると、かなり負担感が出て苦しいと思います。資料の上の方で「授業が変わる」とあり、初っ端から情報活用能力の育成とか、各教科の学びを深めるICT活用とか、ありますよね。これはやっぱり大変じゃないですかね。やっていくうちに、様々な学習活動の中でICTを駆使すれば、結果としてリテラシーが育つところもありますよね。ですから、まずは使ってみる、まずはやらせてみる、ということで、だんだん軌道に乗ってから、次第にこのような授業像を展開していくということです。この三つの中で、「家庭とつながる」、「働き方が変わる」、こちらの方を先に出されたほうが現場にうまく浸透できるんじゃないかと思ったところです。それで、資料4ページに書いてありますように、今教育界ではリテラシーとコンピテンシーの両方をどう生かしていくかというのはいつも議論になっているところです。そういったものを分断することなく、ここに書いてあるような「思考力、判断力、表現力」というものも含め、順序性を少し考えられるのが良いかと思います。結局三つは当然相関していますのでバランス良くやる必要はあるんですが、トライアングルを前面に出すのではな

く、実際現場に投げかける時には優先順位といいますか、やはり優しいところからという順番を考えることも必要じゃないかと思います。そして5ページの「授業が変わる」というところでは、「一斉学習」「個別学習」「協働学習」でも言いましたように、タブレットだけではないんですけど、インターネット環境によって、例えば、一斉学習において労力が削減できるかどうかというような見方。或いは、「個別学習」というのは個々に対応しなければならないのでこれもまた大変ですよ。それをICTによってある程度楽にすることができるかもしれません。そして「協働学習」というのは、一堂に集めないと本来できなかったわけですけども、リモートで有効なソフトを活用することによって可能になると考えられます。いずれにしても、Aをやれ、Bをやれ、Cをやれと言われても現場の先生方は大変だと思います。大変ですが、でも、ICTを活用するとこんなのが楽になるんですよという、やはりそういったものをまず前面に出すことが最初にやるべきところだと思います。最終的にはこの8ページの「推進に向けて」というところの検討事項なんですけれども、ICT活用能力の向上のための組織というところで、ぜひ御検討いただきたいのは、若い人の方が長けているような気がするということです。ですから、年齢で上から組織化するよりは、むしろ若い人をお願いした方が良いかもしれない。というのも、実は児童生徒の方がセンスとしてはデジタル化してる部分もあるんですよ。そういう子どもにうまく伝えることを考えると、やはり世代が非常に近い方々にお任せしたほうが良いような気がします。ただ、先程出てきましたコンピテンシーといったことになるとベテランの先生が御存知でもあるので、そういう意味では両者の交流というのが重要になってくるんじゃないかと思います。あと、タブレット使用のルールというのは、これから色々ところで問題が出てくるわけなんですけども、タブレットは壊れたら自動車みたいに板金塗装とか、部品交換がほとんどできませんよね。壊れた、イコール交換です。恐らく、そういうところでの動産保険というのはとても金額が高いのではいかと思います。ですから、最初の調達は仕方ないとしても、今後も市のお金を使うとするならば、例えばリースとか様々な形態を考えないと、かなり財政を圧迫することも懸念されるところであります。そして、最後の転入児童生徒の端末です。今、OSでいうと4種類ありますよね。でも結局OSなんか関係ないような時代ですよ。要はその上に乗っかっているのが何かということなので、その中でこれからやっていく時に、プラットフォームとしての教育ソフトを買うのか、あるいはそれぞれで開発して使うのか、すでにインストールされているソフトを使うのか、この辺りもやっぱり検討しないといけない。一番楽なのは多額のお金を出して、どこかから買ってそのまま全部インストールすると、現場の先生たちが考えたりしなくて済みますよね。その辺りもやはりその検討材料の一つだろうじゃないかというふうに思います。長くなりましたが以上

です。

【伊豆市長】確かに、モデル校となっていますかとう学園等から、実際に導入すると楽だな、ということをいかに広げられるかというところではないかと思えます。ですから今石丸委員がおっしゃったように、若い方が持っている機材に対するノウハウと、ベテランの先生が持っている、教科に対する今まで積み上げてきた経験といったものが合体できて、それが共有できれば良いですね。この教材は、この先生方に作っていただいたものを宗像市内の先生たちで共有させてもらったら良いのではないかと、教材研究にかかる時間を非常にコンパクトにできるんじゃないかと思えます。先程おっしゃったように、大変よねという仕切りとかハードルをいかに下げて伝えられるかということがやはり大切ではないかなと思えます。楽になるんだったら勉強しようと思えますよね、人って。これをやったほうが多分楽になるということを、いかにモデル校から広げていけるかが大事ななというふうには思っています。

【宮司委員】今、石丸委員のお話を聞いてとても勉強になりました。ありがとうございました。私は専門的なところが何もわからないので、質問と私の思っていることを言わせていただきたいと思います。かとう学園が研究指定校となっていると思いますが、それで実際に子どもたちや先生が、こういうのがあって良かったとか、そういった声があると思うんですが、それをお聞かせいただきたいなと思えます。

【高宮教育長】かとう学園が実際に動き出すのは来年度です。ただ、かとう学園の校長先生の中に、特に情報教育を推進していきたいという強い熱意を持っておられる校長先生がいらっしゃいます。今回の予習学習のときには、河東西小学校からは、積極的にホームページを活用して1番に動画を配信していただいた、という先進的を色々していただいています。ただ先生方一人一人がどうかということまでは、まだ把握し切れていない状態です。

【宮司委員】ではこのタブレット100台というのは、これまで整備したということは一応あるけれども、まだそんなに使っていなかったということですか。

【高宮教育長】河東西小では研究でされてきましたよね。

【名切指導主事】河東西小と日の里中の2校で100台です。県の研究指定を受けて3年目に研究発表会をしています。ですが、当時のものなので端末も古くなっております。

【高宮教育長】あの時は日の里中と河東西小で、平成28年度でしたよね。

【名切指導主事】そうです。ここにつながるような先進的なことは、当時からされていらっしやいました。

【宮司委員】では今も、実際使っているクラスはあるということですか。

【名切指導主事】あります。

【宮 司 委 員】それはどういう感じでされていますか。

【教育政策課指導主事】資料の青で示したところと、ピンクで示したところにも入ってきております。ロイロノートというものを使って、電子黒板に写して操作をするようなこともしています。最近出たものでは当時買った端末だとちょっと固まってしまうという現状もありますが、積極的に使われていて、子どもたちから良い反応もあるというのはホームページ等でも公開されています。

【宮 司 委 員】保護者の方が観にこられるということもありますか。コロナの前にはなると思いますが、端末を使ったもので授業参観などもされていきましたか。

【村上指導主事】はい。教育政策課の村上です。これは3年前くらいの事業になりますが、基本的には今後ICTを各学校に入れていくための、まさにモデル事業のような形でした。学校の中で一斉授業をする際に、タブレットをどのように使えるのかとかですね。どちらかと言うと先生方が研究に使われていたような状況です。確かにそこで色々な成果も出てきて、それが子どもたちに1台ずつぐらいの端末を配布できれば、もっと可能性は広がっていくのではないかという結果はたくさん出ておりました。ただ、私も石丸委員のお話を聞きながら、先生方が覚えられないといけない、準備しないといけないものが余りにも多過ぎるような研究になっていたなという感を持っております。今回、新たに端末が導入されてより広げていくことを考えると、石丸委員のご指摘のとおり、いかに授業が効率よく進められるのかといった、そういう部分をもう少し考慮しておかないといけないなと感じています。それらを保護者の方や地域の方に広げるところまでは、これまでやっておりませんので、ここから先は今後の取組になっていくと思います。これまでは、あくまでも先生方と子どもたちが使うというようなかたちでした。体育では水泳とか、特に中学校では剣道の様子を録画するというようなことにはかなり積極的に使っていますので、これから色々活用の幅を広げていきたいと思えます。

【宮 司 委 員】ありがとうございます。

【伊 豆 市 長】ほかにご意見がありましたら、どうぞお願いします。最終的にはもちろんGIGAスクール構想の実現ですが、基本はやっぱり人と人、先生と子どもとの学校現場でありますので、ICTの機材を導入するということはあくまでもより良い教育を進めるための一つの手段であると思えます。ICTが全てではないという共通認識は、皆さんとも現場とも持っておきたいと思えます。ICTありきではないというふうに、私自身は理解しております。

【高 宮 教 育 長】今回、コロナで休校になりました。そして、各学校で先程申しました動画の配信をしていただきました。そうすると、学校によってはそれが今回の予備的、準備的な体験にもなったんですね。今まで動画配信をしたことのない先生が、若い先生と一緒に動画配信をしてみると、これはできるんじゃない

いか、そう難しくないなとかです。このような意味で、今回の長期休業中に、動画配信をしていく実体験をすることには繋がりました。そして、ICTと言うと、心がこもっていないんじゃないかと言われる方もいます。教育そのものがやっぱり人と人が寄って、というのはもちろんそうなんです、そういった理由で全然ICT化に入っていないという人がいたんです。人が人を育てるのが教育だから機器なんて使ってもあまり意味がないと、もう最初から毛嫌いしている。そういう方もいらっしゃったんです。けれども、今回学校で取り組むことによって、少し払拭されたという報告も受けております。そして、もう一つ思うのは、学習の保障として復習の時からプリントをたくさん配っていました。でも保護者の方からすると、プリントだけ渡して投げ渡しではないか、家庭でやれと言うだけか、という意見も一方で聞こえてきたんですね。プリントはどんどん与えるけれど、各家庭でただやるだけかという。そこに、先程言いましたように、ちょっと言葉が入るとか、電話で連絡が入るとか、やっぱり機器もうまく使いながらバランスを取ってということだろうと思います。動画だけどんどん流して、はい終わりじゃなく、やっぱそこに関わりがないといけない。ですので、優秀な動画などたくさんありますが、それを流したから学習が終わりではなくて、やっぱりそこに生身の先生が出て来るとか、担任の先生の声が聞こえる、語り掛けがあるとか、その辺は抜きにしてはいけないかなと思います。4月に入学式ができませんでした。代わりに入学の手続をしました。中にはもうリモートでやったらそれでよしという意見もありましたけれども、やっぱり保護者にしてみれば、うちの子どもはどんな学校に行くんだろう、担任の先生は誰なんだろうというところが知りたいわけですね、いくら動画で流しても。やはりそういう人と関わる場面も必要なので、ICTは万能ではない。でも可能性も大いにある。その辺のバランスかなと思っています。

【伊豆市長】ほかに何か御意見ございませぬか。ないようですね。皆様方から貴重な御意見をいただきました。ありがとうございます。本日皆様からいただきました意見を参考に、GIGAスクール構想の実現に向けて力を尽くしてまいりたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

(2) 宗像市における特別支援教育について

【伊豆市長】それでは2項目目、「宗像市における特別支援教育について」の協議に入ります。福岡教育大学の敷地内に、福岡県立の特別支援学校が令和7年度に開校する予定で、現在その敷地造成の準備を宗像市で行っているところです。この県立特別支援学校は度々話題にのぼるのですが、宗像市として、市内の小中学生にどのような特別支援教育を行っているのか、現状と課題をご説明し、これからの宗像市の特別支援教育の方向性や県立特別支援学校との連携について、市民に分かりや

すく説明していく必要があると考えています。推進に当たって、教育委員の皆様からのご意見を賜りたく議題として提案するものです。それでは事務局から説明をお願いします。

【川原指導主事】教育政策課の川原です。よろしく申し上げます。特別支援教育につきましては、国や県では最終的なゴールとして、共生社会を形成していくということが掲げられています。それを実行していくためには、インクルーシブ教育システムをつくっていかないといけない。そのインクルーシブ教育とは何かと申しますと、人間の多様性の尊重を強化したり、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な限り最大限まで発達させ、自由な社会に効果的に参加したりするという目的のもとで、障害のあるもの、ないものとともに学ぶ仕組みのことをインクルーシブ教育と言います。そのためには、障害のあるものが教育制度一般から排除されなかったり、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられたり、個人に必要な合理的な配慮が提供されたりすることが必要になります。そうするためにも、特別支援教育を推進していきましょうという方針がございます。この中では、多様な学びを整備したり、学校間連携を推進したり、関係機関等との連携をしたり、教職員の専門性を確保したりすることが求められています。宗像市におきましては、文部科学省の委嘱事業として資料に記載している事業を行っています。また、平成18年度には宗像市教育委員会が指定した事業について赤間小学校で取組を行っております。そうすることで、通常学級に在籍する児童生徒を含め、障害のある児童生徒への関係機関と連携した総合的な支援体制の整備を整えてきたところでございます。その中で、子育て世代が増加し、支援が必要な児童生徒が大幅に市の中で増加をしまいいりました。それはきめ細やかな特別支援教育の充実が、子育て世代に選ばれる都市イメージの確立の大きな要因になったと考えられます。そこで宗像市では「宗像市学校教育重点アクションプラン2020」の中で、今年度、特別支援教育を充実していこうということを考えております。また、令和2・3・4年度の3年間で福岡県の重点課題研究指定を受け、通常学級における特別の支援を必要とする児童生徒にかかわる教員の指導力向上を目指した支援体制の整備をしていこうと考えているところです。福岡県の現状としましては、現在、全体の中で4.86%の児童生徒が特別支援学校や特別支援学級、通級指導教室で指導を受けております。それに対して、宗像市では全体の6.61%が特別支援学校や特別支援学級に在籍したり、通級指導教室で指導を受けたりしています。ここで比較していただきますと、特に特別支援学級に在籍する児童生徒数が多くなっているということが分かります。また、特別支援教育に関する現状の中で児童生徒数がどのように推移しているかというグラフを見ていただきますと、ここ10年間で児童生徒数がおよそ4倍増加していることが見て取れます。また特別支援学級の学級数においても、資料で示

したように増加しています。次の資料は、特別支援学級における障害種別の児童生徒数の推移です。このように知的障害を持っている児童生徒数も少しずつ多くなっていると思いますが、特に自閉、情緒障害を持っている児童生徒数が非常に多くなっていることが分かると思います。また通級指導教室については、自由ヶ丘小学校、日の里西小学校、中央中学校の3校に設置しておりますが、定数13人に対してそれ以上の児童生徒が在籍しております、その中で先生方も対応されている状況です。これらの特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室について、どこがその子にとってふさわしい教育の場なのかということ相談する教育支援委員会の相談数も、ここ5年間でおよそ2倍に増えていきます。資料の赤で囲っているところが令和元年度の数値ですが、就学前の子や、小学6年生が中学1年生になる際に就学相談を受ける人数はもちろん多いです。しかしその中でも、小学校1年生時から5年生時、中学校1年生、2年生時において、約78名が途中で別の指導を受けた方が良いのではないかと判断を受けているという現状があります。これは、宗像市で教育支援委員会、就学相談が認知されてきて、特別支援教育が各家庭にも少しずつ認知されてきた結果ではないかと考えています。また、次の資料は、特別支援学級の担任と特別支援教育コーディネーターの人数を、経験がある先生方と新任の先生方で比較したものになります。先ほど申し上げたとおり、生徒数の増加に対して先生方もその分増員しないといけないということで、新任の先生方が非常に多くなってきていることが分かると思います。こういった状況に対応するために、宗像市では教育支援委員会を年14回開催するとともに、通級担当者による在籍学級の授業参観及び情報交換の実施、特別支援学級増に対応した施設づくりや教育環境の整備、特別支援教育アドバイザーの配置、特別支援教育支援員の増員といったことを行っています。そして学校では、特別支援教育校内委員会を月1回程度実施するほか、支援を要する児童生徒の実態・対応等の共通理解を図る場の設定、特別支援教育に関する研修会の実施、個別の教育支援計画・指導計画の作成、特別支援教育コーディネーターの指名、特別支援教育支援員を特別支援学級及び通常学級でどのように活用するかの検討を行っています。そういった中で、特別な支援が必要な児童生徒の増加及び教育ニーズが多様化していく点や、教職員の若年層の増加に伴う新任特別支援学級担当者及び特別支援教育コーディネーターが増加している点が課題として挙げられます。そこで宗像市の特別支援教育に関する課題として、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援と、障害のあるものと障害のないものがともに学ぶ仕組みが必要だと考えました。そのために、全教職員の特別支援教育への理解の促進、専門性・指導力の向上、特別支援教育コーディネーターの育成、多様な学びの場の整備といったことが必要だと考えました。次のスライドは、特別支援教育の最終目標である、宗像市立学校に通う全ての子どもたちの夢や目標の実現を支援する

ために、学校や、市でどのようなサポートをしていけばいいかという体制を表したものになります。それぞれを詳しく説明いたします。まず特別支援教育研修会を学校で行います。研修会の実施により、全職員の理解の促進や専門性の向上を図り、指導力の向上を狙います。そのための市の支援事業として、特別支援教育コーディネーターや特別支援教育支援員に向けた研修会、さらに通級指導教室担当者の連絡会も行っております。また、この研修をサポートするために特別支援教育アドバイザー派遣事業も活用しております。さらに、専門性の向上という部分で、連携推進事業として県立特別支援学校のセンター的機能を活用しております。また、福岡教育大学との連携や各関係機関との連携も行っています。次に、校内体制の充実です。特別支援教育コーディネーターを核にして校内体制を充実させることを狙っております。この核となる特別支援コーディネーターの働きを充実させていくために、特別支援教育アドバイザーを派遣します。アドバイザーを派遣することで、コーディネーターの支援を行ったり、学校の授業はどうか、児童生徒の様子はどうかという定期巡回を行ったり、学校の研修会等での活用も目指して、学校からの要請に応じて訪問を行ったりしています。また、既に配付されております特別支援教育のタブレットの活用もしております。次に特別支援教育アドバイザー派遣事業についてご説明をいたします。資料右側の図をご覧ください。学校において様々な機関や関係者と連携を取ったり、校内委員会を実施したりする上で、特別支援教育コーディネーターが非常に大きな役割を担っております。この特別支援教育コーディネーターは各校に1名ずついますが、そのコーディネーターへの支援や指導を主に行っていくために特別支援教育アドバイザーを配置しております。つまり、校内研修や授業改善を支援したり、特別支援教育コーディネーターに対する指導助言を行ったりすることで、最終的にはこの特別支援教育コーディネーターがそれぞれの学校で授業改善や校内研修を実施できるようなレベルまで持っていき、併せて他の先生方への周知を行っていくたいということです。次に連携推進事業についてです。連携を推進していくことで、児童生徒たちに多様な学びを整備したいと考えております。そこで、県立特別支援学校のセンター的機能を活用する連携や福岡教育大学との教育連携強化、放課後等デイサービスの活用、幼稚園・保育所等連絡会、のぞみ園との連携を現在実際に行っています。支援が必要な子どもたちのニーズに合わせて、どのようにそれぞれに適した指導の場を提供していくかということを考えていく場として、教育支援委員会がございます。もともと教育支援委員会は、保護者と児童生徒、専門の先生方が面談を行って、この子に対してどの判定が良いのだろう、どの教育の場が良いだろうというふうに判断をしていたんですが、余りにも人数が多くなり対応していくことが難しくなったため、新たに資料のBで示した仕組みを追加しました。児童生徒、保護者、学校の三者の意見が一致している場合、

かつ、保護者が面談を希望せずに、アドバイザーの聞き取りが学校の中で行われた上で、判断会議のみの実施で大丈夫だという場合に、このBという新しい仕組みを追加しております。このことによって、就学相談の面談時間を削減することができ、より多くの児童生徒に対して最適な学習の場を提供できるような仕組みをつくりました。最後に、通級指導教室に関する取組について説明をいたします。現状では通級指導教室の児童生徒数は飽和状態にあります。そこで新たな取組としまして、通級指導教室はあくまで週1回、2時間程度の指導を行う場ですので、最終的には全ての在籍学級において、通級指導教室で行われているような指導を行ってもらうことで、通級指導教室からの退出を行い、在籍学級でその子に応じた指導を行っていきたいと考えております。そのため、通級指導教室と在籍学級の連携を特に重視しているところでございます。また、通級指導教室内でもさらに指導力を向上するため、通級指導教室間の連携を行ったり、その子に必要な支援は何なのかということをはっきりするため、個別の教育支援計画を活用するとともに指導計画の作成と活用を行ったりしています。また、保護者の方々の相談に乗ったり、連携・情報共有を行ったり、特別支援教育におけるICTを活用したりしているところでございます。以上で、宗像市における特別支援教育についての事業等の説明を終わります。よろしくお願いいたします。

【伊豆市長】ただいま、事務局から宗像市における特別支援教育の現状と今後の方向性について説明がありました。事務局の説明を踏まえて、今後の本市の特別支援教育のあり方についてご意見等がございましたら、委員の皆様よろしくお願いいたします。

【高宮教育長】私から少しよろしいですか。本年度から特別支援教育アドバイザーを教育委員会に1名配置してもらっています。ご存知のように、各学校には特別支援教育コーディネーターという、それぞれの学校の特別支援教育を推進していく先生、担当者がいるわけですね。先程も報告にありましたように、その先生方のうち3分の1程の方が毎年新しく担当になられている先生です。特別支援教育をどう推進していったら良いか、子どもたちをどう理解したら良いかとかいうことについて、自分だけではなくて、学校全体としてどう高めていったら良いかを考える非常に大事なポジションなんですね。その方が新任だとなかなか力を発揮できないというところがあるんじゃないかと。ですので、その方たちを支援していく必要があるということで特別支援教育アドバイザーを設置しました。そして、最終的には全ての先生が特別支援教育についての理解を深めていく、特別支援学級の担任であろうがなかろうが、全ての先生が特別支援教育について十分な理解をし、指導力をつけてもらいたいと考えています。人材育成というか、先生たちの特別支援教育に対する理解を深めていただきたい、指導力を高めてもらいたいと思います。こういった経緯でアドバイザーの配置していただいたところで

す。

【伊豆市長】福岡教育大学に県が設置します特別支援学校ですが、一般の多くの人たちには、実は特別支援学校ということ自体がまだ十分に理解が進んでいない状態なんですね。特別な教育をする学校、ものすごく勉強できる子を育成する学校が教育大学にできるんですかというような質問も、私の就任当初はまだ受けておりました。やはり自分のお子さんなど身近にそういう子どもたちがいたらまた違うかもしれないのですが、なかなか学校現場のことでもありますし、市内全体では実は特別支援教育は多くの人には理解されていないというのが現状なんですね。ですから、宗像市がいかに特別支援教育に注力していて、こういうことをやっているということも、残念ながら多くの方々にはなかなか知られていないという状況です。教育文化都市を標榜していますが、こういう特別支援教育についてもきめ細やかなことをしているということ、教育委員会としてもより多くの場でより多くの人たちに情報発信をしていく必要があるとも思っています。いくら良いことをやっていっても、多くの方に知られていなければそれは非常に残念なことですので、ここはぜひ教育委員の皆さま方のお知恵もいただければと思います。どうしても行政だけだと、やることに視点がいつてしまっ、これを多くの方に知らせるとい視点が欠けている部分も非常にあるなと私自身は考えています。

【宮司委員】随分前になりますが、私の子どもが幼稚園に行っているときに、ある方が市外から引っ越してこられたんですね。どうして宗像市に引っ越したのか聞いてみたら、お子さんがちょっと障害を持っているということで、宗像市が手厚いというのを聞いたから引っ越してきたということでした。実際、その方が住んでいたところはやっぱりそこまで充実はしてなかったらしいんですね。そういうのを聞くと、私は宗像市に住んで子育てをしていたので、宗像市がしてくれていることが当たり前になってたんですね。でも、違うところから来た人はそういう情報を得て宗像市に入ってきているので、それを聞いて、宗像市に住んでいる私がそうなんだって初めて知りました。こんな良いことをしているということをもっともっと市民が知っていくと、それがどんどん広がっていくんじゃないかなということをおすごく思ったことがありました。

【伊豆市長】どんどん広げていただきたいですね。

【教育子ども部長】すみません。市長からも再三言われております特別支援教育のPRについては、色々な手段で取り組んでいきたいと考えています。教育政策課の体制ですけれども、まだ正式な話ではないのですが、来年度から学務係を分けて特別支援教育係を新設したいという考えも持っています。ただ、現実的なところで前倒しをお願いして、今年度から特別支援教育の係長を1人置いて、学務係に係長が2人ということで、実質的にはもう一係設けさせていただいたところで

す。この辺も随時PRをしていきたいと考えています。それと本日の説明ですけれども、資料で示しましたように量的な拡大が非常にあるということです。これは、非常にきめ細かく本市の行政がやっていることの反映という面も理由の一つにはあるのかなと思います。対策としては、一言で申し上げますと、学校の教育力を向上させるということです。先程教育長からもありましたように、全教員で関わっていくということ、単に量的に対応していくのではなく、質を高めて対応していくというのが全体的な考えです。時間もかかるでしょうけれども、一人一人にきちんと向き合って教育していくという、この特別支援教育というのは、本市の教育の姿勢を象徴するものではなかろうかと感じております。それから特別支援学校。これも先程から話が出ていますけれど、単に県の学校が宗像市にできるということではなくて、この機能を活用していく、併せて、福岡教育大学の敷地の中にできますので、大学との連携も深めてさらに色々な教育の質を高めていくことを、宗像市としては考えて調整しているところです。要は教育力を上げたいということですね。これが、繰り返しになりますけれども、宗像市の教育に対する姿勢を象徴するものだろうということです。以上です。

【主幹指導主事】 私からもよろしいでしょうか。先程、宮司委員のお話でしたが、市長から申しつかっております特別支援教育についての積極的な発信ということで、一番のメッセンジャーはやはり行政ではなくて、そのメリットを受けている子どもたちや保護者であるだろうというふうに考えております。学校現場はもちろん、私どももそうですが、教員の養成課程において特別支援教育について学んで教員になったわけではございません。しかし、このようなニーズが高まる中で対応しなければならない状態で、学校現場も本当に模索をしながらの対応ということでございます。ただ、提出される様々な文書を拝見しておりますと、保護者の方は大変よく勉強しておられます。わが子にどんな苦手があり、どんな得意があり、そしてどんな支援をしてもらいたいと願っておられるかというようなことが、文章を見るとしっかり分かるところです。そこで、今年度ぜひ重点を置いて充実させたいと考えているのが、個別の指導計画・支援計画でございます。現状、学校は作ってはおりますが、学校の担当者だけで作ってそれがなかなか更新されていないという現状がございます。それをぜひ保護者と共有して、そのお子さんにどんな得意があり、どんな苦手があり、そして将来どんな子どもに育ってほしいのかというようなことを、話をして共に子育てをしていくような構えというのを共有していくことが大事ではなかろうかと思っております。恐らく保護者の方は、生まれてから本日に至るまで、色々なところと連携を図りながら助言を得て、こういうことがこの子にとっては有効であるというような情報は持っておられます。また、学校の教員というのは、その期間は関わることができますが、将来まで継続して関わることは出来ない訳で、そういった意味でやはり

保護者に教育に参画していただいて、共に知恵を出していくというようなことはとても重要だと思います。そこで充実した教育がなされ、子どもが成長していったときに、宗像市の特別支援教育、学校教育はすごく良いんだよ、うちの子どもがこんなふうに伸びたんだよというような言葉に繋がっていきたくらい、そのことが恐らく先生たちにとっては最大の手応えであり、後押しになると思います。そういう意味で先ほど話がありましたが、特別支援教育アドバイザー、今年度江崎指導主事が担当しておりますが、学校へのアドバイス、また訪問もしております。教育支援委員会にも参加していて、特別支援教育に関する全ての情報について集約をしています。そういった面に関しても、学校で保護者の方にも参画していただく特別支援教育の充実という意味で、宗像市の特別支援教育に大きく貢献するものと期待しているところです。以上です。

【釜瀬委員】令和7年に特別支援学校が福岡教育大学の方で開校されるということで、宗像はやはり教育推進の町といったようなことを銘打って、大学と連携して強化しているんだとか、今回、コロナの関係でタブレットを全員に配付してこんな教育をやっているんだというようなことをぜひ進めていただきたいですね。市長もいつも市民にどんどん宣伝するようにおっしゃっていますので。現場の先生はちょっと遠慮しがちですけど、もっともっと積極的にアピールをして、宗像って教育が充実しているんだ、特別支援教育についても人的にも施設の面でも整っているんだというようなことを、ぜひもっともっと宣伝していったら良いと思います。今思うと十数年前ですか、教育長が赤間小の校長でいらっしゃったときに国の指定を受けて推進したときがありました。その後、やはり支援を受けている子で、うちの子は宗像の方に、というかたちで来られた子どもさんもいらっしゃいました。宗像は昔から「教員と卵は宗像」と言われていたこともあったと思いますが、もっともっと「教育のまち宗像」とか押してもっと宣伝したら良いのではないかなと思います。それから今日、教育支援委員会の流れの説明を受けて、判断会議でBの項目を起こされたことはとても良いことだなと思っています。私がずっと判定会議に出ていた時に、判定会議で判断しても、なかなか保護者が納得できないとか、許容できないということがありました。その後現場で保護者と子どもさんと呼んで、子どものためについてというようなことを保護者の方と話をするんですが、それでもなかなか理解してもらえなかった時代もあります。今の人数を見ると、やっぱり個に応じた指導が大事だとか、個別の色々な指導や教育活動が大事だということを、保護者の方の中にも市民の中にも御理解されてきたと思いますので、このBの仕組みは良かったんじゃないかなというふうにしています。私も教育委員として宗像の教育が充実したということを色々なところで話をしていきたいと思っています。やはり宗像は、現場にいた時でも教育予算は充実しているし、人的配置も充実していたような気がします。そういったとこ

ろを一教育委員として、宗像は教育充実しているよということで、もっともっと協力していきたいと思っています。以上です。

【伊豆市長】ありがとうございます。

【大庭委員】ご説明をお聞きして、より特別支援教育が充実してきたなど実感させていただきました。これまでお話があったように、私も現場にいる時に、何人もの方から宗像市に転入してきたいのですが、という1年生の入学の時の連絡を受けました。どうしてそういうことをご存知なんですかと聞いたら、その当時指定を受けていることもあったので、専門機関の方が宗像市が良いって勧めていらっしゃるんですよ。私が接した例では、だから、宗像市の市民よりも外の世界の方がそのことを認識していたということです。通級指導教室のある宗像だったら、自分の子がどう判定されても良いからということで宗像市に転入したいとかですね。そういう保護者の方と何人も接したので、その当時は外の方が認識があったと思います。それから、通級指導教室のある学校にいたことがありますが、そういうところは、そこに教室があるから自然に保護者の方の理解ができていたように思います。やはりこういうふうに特別支援教育アドバイザーを新しく設置して取り組まれるということは、それが宗像市の良さとしてどんどん市民の方に伝わっていくのではないかと思います。もう一点はですね、県立学校がある市町村に勤めたことがあるんですが、幼稚園とか小学校にどんどん積極的にその先生が来てくださるんですよ。そうすると、特別支援教育担当者よりもっと専門的で、直にその子を見て指導方法も指導してくださるから、先生方にとっても有難いんですね。だから、福岡教育大学にできる県立学校との連携は具体的に考えていらっしゃると思うんですけど、ぜひその専門性を宗像に活かしてもらおうと、今は土台があるので、よりそれが充実していくのではないかなというふうに感じました。

【石丸委員】みなさんのお話を聞いていく中で、とてもよく理解できました。今日のこの総合教育会議の議題の一つとして、これが挙げられたことの趣旨が最初分からなかったんですが、今お話を聞いてそして市長の話を伺ってやはりこれは総合教育会議の議題としてふさわしいなと思いました。特別支援教育を推進するうえでは、よく環境と雰囲気というのに分けるんです。環境というのは、例えば特別支援学校とか特別支援学級や通級指導教室とか、そういった所謂教育力の向上のための様々な施設といいますか仕組み作りですね。もちろん釜瀬委員がおっしゃったように、特別支援学級でやっぱりタブレットの効果というのは非常にあると聞いております。こういったものも環境整備であり、その環境整備によって教育力が向上するということですね。それともう一つは、雰囲気が重要じゃないかと思います。特別支援教育に関して広く遍く考え方を広げていく必要があるわけなんです。それと、この度はSDGs 未来都市への選出大変おめでとうござ

います。本当にこれはタイムリーだと思いましたが、SDGsの考え方にNo one will be left behind. 「誰一人取り残さない」という考え方があるわけですね。すなわち、SDGs未来都市である宗像市というのは、まさにその誰一人取り残さないという考え方を持った都市であるということです。やはり市民として共有したい優しい言葉ですね。この誰一人取り残さないという市民の意識の向上というのも、結局は、宗像市が特別支援教育に対する市民全体の理解を深めることにもなると思います。まさにこの環境と雰囲気の両方をめざして、また恐らく相互に関係するし相乗効果もあるでしょうし、そういった意味では、やはり教育委員会と市長部局の両方が目指していく一つのゴールとしてふさわしいものではないかと思ったわけです。ではそういったものを実現する舞台としては、やはり学校になるわけで、その学校にはまさにその環境と雰囲気の間方が必要であろうかと思えます。13ページの資料にお示しいただきましたように、やはり課題として一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援、それから、障害を持つ人とそうでない人がともに学ぶ仕組み、これを両立させるにはかなりの知恵を絞らないと簡単には実現不可能ですね。やろうという意識を高めるためには、この誰一人取り残さないという気持ちを教職員全てが持つことによってうまくいくんじやないかと思えます。こういった特別支援教育の原点に、教員だけでなく、市民全体がやはり気付くということじゃないかと思うんですね。そして気付くだけではなくて、どう理解するかというところに持っていくかが重要です。キーワードになっているのは「ケア」という言葉です。こういった観点で学校において様々な取組をしていただくことによって、教育の町としてのブランド形成ができるんじゃないかと思えます。SDGsに向かう教育を私は専門でやっておりますが、ホールスクールアプローチというのがありまして、つまり学校全体で取り組むという考え方です。特別支援担当の先生だけに、ではなく、学校のどこを見てもそういった配慮というかケアの精神がある、職員室にもあるし、校長室にもあるし、全ての教室の廊下にもトイレにもあるという、そういうどこを切ってもそういった考え方があるというのがホールスクールアプローチです。この考え方を応用しますと、ホールスクールアプローチが最終的にはホールシティアプローチ、市のどこを切ってもそういった誰一人取り残さないという考え方に満ち溢れているということです。まさに、本日こうやってあげていただいたことが、SDGs未来都市のスタートにふさわしい議題であったんだなということを感じたところでございます。

【伊豆市長】SDGs未来都市に福岡県で4番目に選ばれて、それを担ってきた経営企画部長と担当が本日同席しておりますが、私たちも、今石丸委員がおっしゃったように、誰一人取り残さないSDGs未来都市と特別支援教育が結びついているという点には気付いていなかったもので、特別支援教育を語る上でこ

のSDGs未来都市と非常にマッチしていて、宗像市が向かおうとしている、目指しているまちづくりと教育ということに非常に説得力のあるお話であったなと思います。ありがとうございます。それを目指していきたいですね。ほかに何か御意見ございませんか。ないようですね。では、本日皆様方から頂いたご意見も踏まえながら、特別支援教育のさらなる充実を図っていきたいというふうに思いますので、どうぞよろしくをお願いします。ありがとうございました。

(3) その他

【伊豆市長】ではその他に入ります。何かその他でご意見等がございましたらお願いいたします。ないようですね。では、事務局をお願いします。

3 閉会

【教育政策課長】どうもありがとうございました。それでは閉会に入ります。今年度につきましては本日の会議1回を予定しておりましたので、次回の会議は来年度のこの時期、令和3年の7月頃の予定です。ただし、年度途中でまた皆様にご協議いただきたい内容が生じましたら、総合教育会議を開催させていただくこともあります。その際は日程も含めて改めて御連絡させていただきます。それでは最後に閉会の言葉を市長お願いいたします。

【伊豆市長】では以上をもちまして、令和2年度第1回宗像市総合教育会議を閉会いたします。本日はお忙しい中、皆様ありがとうございました。